

地域資源の活用と農産物の直売による 山村の活性化

—— 愛媛県内子町の事例 ——

篠 原 重 則

I 緒 言

今日の農山漁村は、農林水産物価格の低迷、後継者の減少等によって活力の低下している地域が多い。そのなかで農林水産物とその加工品の直売によって活力のある農山漁村が幾つか見られる。筆者は元来、四国地方の過疎山村の形成のメカニズムと、その地域特性について研究を重ねて^{1)~5)}きたが、そのような過疎農山村のなかで活力のあるのは、農林産物の直売所と、そこに農林産物を出荷する地域住民であることを、しばしば目撃してきた。筆者の近年の研究主眼は、農山漁村をいかに活性化させるかに移行してきた⁶⁾が、過疎農村の農林産物の直売所とそれに参画する地域住民の活動は、地域社会の活性化に極めて重要な機能を果たしていることを認識することが^{7), 8)}できた。2003年度より科学研究費の交付を受けて実施している「農林水産物直売事業による農山漁村の活性化に関する研究」は、このような認識のもとに推進している研究^{9)~11)}であり、本研究もかかる研究の一環をなすものである。

農林水産物直売に関する報告書は農林水産省の本庁¹²⁾や、各地方農政局^{13)~19)}で近年出版されている。しかしながら全国を通しての統一的指標にもとづく農林水産物の直売施設・直売活動に関する実態調査は、農林水産省の消費統計室において、2004年度によりやく実施され、2004年5月にその概要が公表²⁰⁾されたところである。農林水産物に関する官庁統計が遅れたのみでなく、研究者

の全国的研究組織も、2005年3月によりやく形成された状況である。

農産物直売に関する研究は、1990年代になって盛んになるが、その研究は農産物の直売事業が各県の農業改良普及所の生活改善運動の一環として取り上げられた事例が多かったので、普及所の普及員あるいはその関係者の研究として取り上げられるものが圧倒的に^{21)~28)}多い。その研究を通読すると、①流通論の観点を重視した研究、②小売業・マーケティングの観点を重視した研究、③消費者の行動の観点を重視した研究、④交流拠点・グリーンツーリズムを重視した研究に大別できるが、堀田学が指摘している²⁹⁾ように、直売事業が農村地域の活性化にどのように寄与しているかの視点に乏しいといわれている。

地理学の分野で農産物直売を手がけた研究としては、鷹取泰子・岡橋秀典などの論考がみられる。このうち鷹取の研究³⁰⁾は、埼玉県の115ヶ所に及ぶ農産物直売所の立地展開とその類型化を試み、さらに都市近郊型と観光地隣接型の農産物直売所の地域特性を対比している。一方、岡橋の研究³¹⁾は主として中国・四国地方の農産物直売所の成立の背景をさぐり、さらに東広島市での実態調査によって、農産物直売所の類型区分を行い、その存立基盤を究明しようとしている。両者の研究は、農産物直売についての地理学の研究に先鞭をつけたものとして評価されるが、先述の農業研究者の研究同様、直売事業が地域社会の活性化にどのように連動したかの点は十分に解明しているとはいいがたい。

今回、本論で取り上げる愛媛県内子町の直売所「からり」は、2003年度の販売額が5億円に達し、愛媛県屈指の販売額を誇っている点と、直売店と農家の情報交換システムが整っていることによって、注目されている。本報告の目的は、農産物直売所「からり」の発展が、内子町の地域資源の如何なる活用と、住民の参画によって達成されたかの解明にあるといえる。

なお内子町の「からり」に関する研究には、藤目節夫の研究^{32),33)}が公表されている。藤目の研究は直売所「からり」の設立・運営を内子町独自のまちづくりとの関連でとらえている点と、アンケート調査によって来訪者の属性と来訪形態、来訪者の「からり」に対する評価、出荷農家の属性と「からり」の開

設が農業にいかなる波及効果をもたらしたかを解明している点に評価される。残された研究課題としては、広域的視野にたつて、直売店「からり」の地域特性をどのように描出するか、出荷農家の居住する山村地域が景観的にどのように変貌しているかの究明にあるといえよう。

II 内子町の地域特性

内子町は県都松山市から南西 40km に位置する山村である。町域には松山市と宇和島市を結ぶ国道 56 号と高速道路の松山自動車道を通じ、愛媛県内では南予の入口に当たる。内子は藩政時代から明治時代にかけて、和紙の集散地域と、木蠟の生産地として栄えた。往時の建物は旧街道沿いに今に残り、1982 年には国の重要伝統的建造物群保存地区として選定され、今や県内有数の観光地となっている。

内子町の南西部には、肱川の清流に臨む城下町の大洲市、西予市の中心地卯のまち、南予の中心地の城下町宇和島市がある。大洲市・卯之町・宇和島市には古い市街地が残り、2004 年には町並博が開かれた観光地として知られる。宇和島市以南の宇和海はリアス式海岸の風光明媚な海岸線で知られ、由良半島以南の地域は足摺宇和海国立公園に指定され、愛南町の西海地区は海底サンゴの美しい海中公園としても知られる。

肱川の河口は大洲市長浜町であるが、長浜町内の白滝公園はモミジの名所として知られる。長浜と伊予市街の間には、国道 378 号が通ずるが、沿線の伊予市双海地区には「ふたみ潮風ふれあい公園」・「ふたみシーサイド公園」があるが、この一帯は伊予灘に夕日の沈む姿が美しく、「夕焼けこやけライン」として有名である。

以上のように、内子にはその周辺部に観光地が散在しており、観光客の集散地としても機能している。

内子町の集落の大部分は、中央構造線の南側に展開する結晶片岩地帯の緩斜面に立地する。内子町の世帯・人口は 1960 年には、3,954 世帯、19,790 人で

あったが、2000年には3,624世帯・11,231人、老年人口比率29.1%となり、愛媛県の過疎山村の一角を形成していた。

1979年河内紘一町長が就任してから、地域資源開発の総合開発計画を立案するとともに、町内を18のコミュニティを単位とした自治組織に再編し、コミュニティを単位として独自の地域振興策³⁴⁾を立案している。農産物直売所「からり」も町の総合開発やコミュニティの地域振興策の一環として設立されたものである。

Ⅲ からりの設立と運営

農産物直売所「からり³⁵⁾」は1996年7月に開設された。その施設は図1に示すが、施設内には農産物直売所・情報センター・農産物処理加工施設・レストラン・駐車場などがあり、1995～1997年度の農水省の補助事業を活用して建設され、設立当初の事業費は13億円余であった。施設は中山川と小田川³⁶⁾

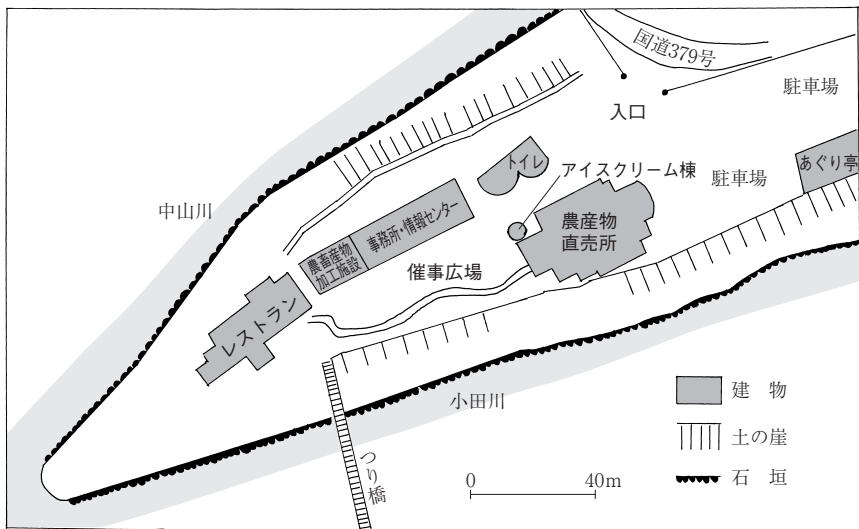


図1 直売所「からり」の施設

の合流点に立地し、施設内には、来訪者がくつろぎながら昼食をとることのできる催事広場があり、小田川に架設されているつり橋から小田川河畔の知成公園ちせいに散策が可能であり、直売所自体が公園³⁷⁾のようになっているのが特色である。

内子町は数次にわたる総合計画とまちづくり計画を策定しているが、2002年度には「からり」の基本計画となる「フルーツパーク構想・基本計画書」を作製している。また農産物直売所という施設の設置よりも農業従事者の意識改革が先行すべきだとの観点から、1995年には知的農村塾³⁸⁾を開設している。

また「からり」の設立に先立つ2年前には、1999年内子町の国道56号沿いに「内の子市場³⁹⁾」を開設し、農家主体の直売所の運営の可能性・問題点の検討、直売活動を志す農家のトレーニングを図っている。「からり」は、このような諸準備の後に開設されたのである。

内子の「フレッシュパークからり」は、第3セクターで運営されている。施設のうち直売所と飲食店「あぐり亭」はそれぞれ直売所運営協議会とあぐり運営協議会に施設を貸与して運営をまかせ、第3セクターは販売額の15%を手数料として受け取ることになっている。直売所運営協議会とあぐり運営協議会はそれぞれ出荷農家と農家の主婦で構成され、下部組織として専門部会⁴⁰⁾を設け、独立採算制で運営されている。

「からり」の株主構成は表1に示すが、内子町と内子町民がそれぞれ株の過半を所有し、農協・森林組合・商工会の持ち株は少ないことである。「からり」は設立当初より、機械化・情報化が進んだ直売所として、全国的に注目を集めた。

「からり」への出荷農家は早朝に野菜・果実等を出荷し、残品を夕刻に引

表1 からりの株主構成 (2003年)

株主名	株数
内子町	400
愛媛たいき農協	20
内山森林組合	6
内子商工会	1
内子町民 (うちからり出荷者)	361 (158)
町外者	12
資本金	4,000万円 1株:5万円

注) 2004年度からり研修資料による

き取るのは、他の直売店と同様であるが、早朝の出荷時に自己のバーコードシールをパソコンで作成し（日時、品目、価格、出荷者を打ち込む）、そのバーコードシールを出荷品に貼付し、売場に配置するのである。からりの情報室は農家のバーコードとレジの売上情報から、個人別、また「からり」の全体の売れ行き状況を集計し、これを各出荷農家に知らせるのである。集荷農家とからりの情報室は表2のように情報を交換する。各出荷農家は端末機を各自備えており、自分の出荷した野菜・果実などの販売状況が定時的に把握できる。したがって自己の出荷品が売り切れていると随時追加出荷もでき、閉店時に自己の野菜・果実等が売り切れていると、残品を取りに行く必要がないのである。現在は携帯電話のメールによって、からりの情報室と畑にいる出荷農家は情報が交換できるのである。

「からり」の販売額と出荷者数の推移は、図2に示す。「からり」設立の1996年には販売額9,200万円・出荷者176人であったものが、2003年には販売額4億1,300万円、出荷者数360人となっている。この間に販売額は4.5倍、出荷者数は2.1倍となってい



写真1 早朝、農産物を出荷する農夫（2004年11月）
自作のバーコードを貼付



写真2 出荷物を売場に陳列する農夫（2004年11月）

表2 からの農業情報の活用

【情報端末画面1】

1#	からの販売状況
2#	ニュース
3#	天気予報
4#	生活情報
5#	観光農園情報
6#	フレッシュパークからの

番号を選んで#を押して下さい

メニュー画面1：欲しい情報の番号と#を押す。

【情報端末画面2】

1#	出荷予約
2#	販売状況（個人）
3#	販売状況（全体）

番号を選んで#を押して下さい

メニュー画面2：農産物の出荷予約及び販売状況メニュー画面

【情報端末画面3】

【出荷予約】

予約日	7月28日	【新規】
コード	217	桃
単価	2,500	
数量	10	
1#	：修正，2#：次入力，	
3#	：終了	

出荷予約画面：出荷予約情報を情報センターに集中し，販売用バーコードシールを自動印刷

【情報端末画面4】

【販売状況】7月28日15時

コード	売上金
010	ごぼう 2,760
011	さつまいも 6,500
201	ぶどう 8,000
217	桃 7,500
227	すいか 3,600

(#：次画面，0#：前画面)

販売状況画面（個人）：出荷した農産物の販売額が1時間毎に把握できる

【情報端末画面5】

【販売状況】7月28日15時

コード	売上金
010	ごぼう 15,780
011	さつまいも 37,600
201	ぶどう 25,000
217	桃 114,500
227	すいか 89,500

(#：次画面，0#：前画面)

販売状況画面（直売所全体）：直売所全体の販売額が把握でき，出荷計画に利用できる

注) からの資料による

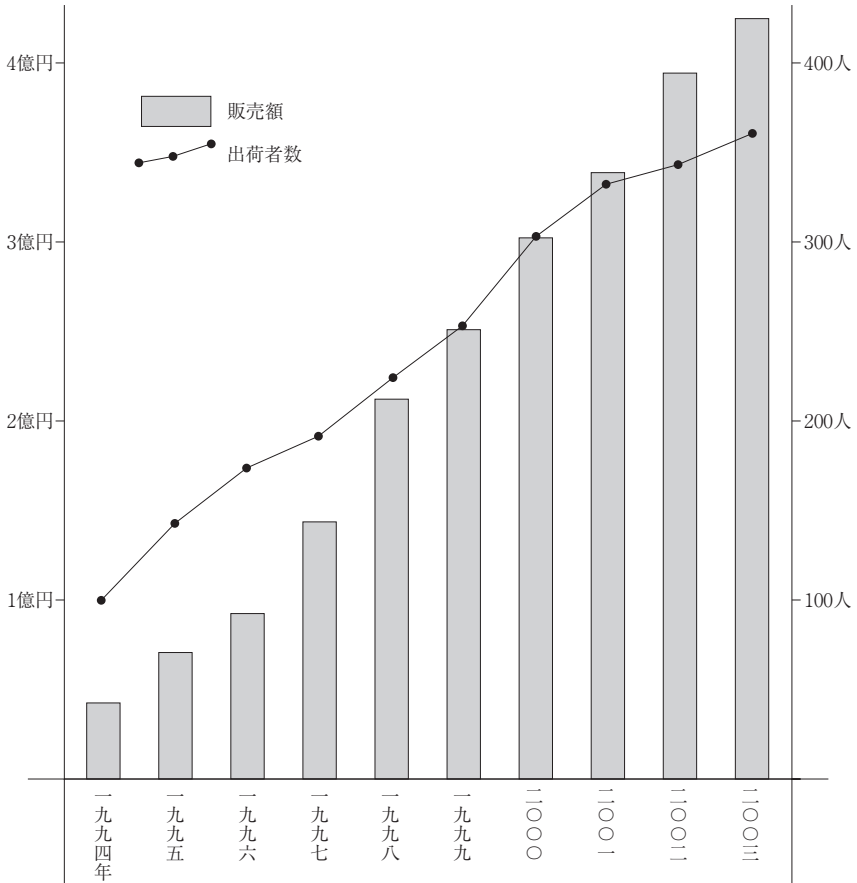


図2 からりの販売額と出荷者数の推移

注) 2004年からの資料より作成

る。

それでは直売品の品目構成はどのようになっているのであろうか。図3は「からり」の品目別販売額を示すが、第1位は果樹類で33.1%、第2位は加工食品で25.5%、第3位が野菜類で22.4%となっている。内子町は山間地で

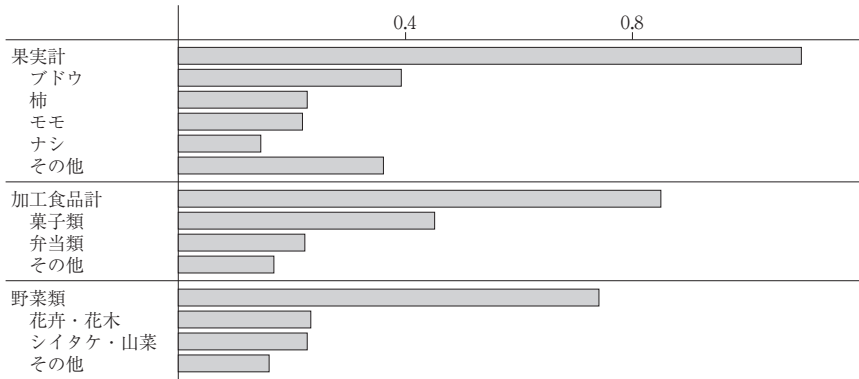


図3 からりの品目別出荷額

注) 2004年からの資料による

あるが故に、冬の寒さが厳しく、愛媛県の特産品の柑橘類は少ないが、ブドウ・柿・ナシ・モモなどの落葉果樹が多いのが特色である。山間地の一日の気温較差の大きさは、果実の糖度を高め、美味な落葉果実を育てるのに有利である。加工食品は菓子類・弁当類などであり、「からり」内の加工場、あぐり亭で生産されるものもあるが、農村婦人のグループや個人で生産されるものもある。野菜類以下では、野菜類22%が突出するが、花卉・花木7%、シイタケ・山菜6.9%がみられる。シイタケはこの地域が大正年間以降木炭生産が盛んで、伊予の切炭地帯といわれ、シイタケの榎木として適するくぬぎ林が多いことにも由来する。

表3は内子町の農林産物の総生産額と出荷先を示す。内子町の2003年度の農林産物の生産額は19.9億円であるが、その生産額が一番多い葉タバコはJTとの契約栽培であり、全量JTに出荷される。柿の生産は落葉果樹の王座を占めるが、農協の生産部会の組織が強く、主として農協の共販である。ブドウは観光農業が盛んで、農園独自の直販体制を確立している。米は農協出荷が圧倒的に多く、乾燥シイタケは伝統的に森林組合出荷である。「からり」への出荷比率の高いものは、野菜⁴¹⁾と果実、花卉と生シイタケであるが、内子町全体の

表3 内子町の農林産物の出荷先（2003年）

品目	総生産額	農協・森連・卸売市場	観光農業	からり	からりの出荷割合
米	16,913万円	16,695万円	万円	218万円	1.3%
キュウリ	6,703	6,098		604	9.0
野菜類	13,260	4,200		9,059	68.3
イチゴ	3,587	2,426		1,161	32.4
栗	8,760	7,360		1,400	15.9
富有柿	32,766	30,848		1,918	5.8
梨	4,478	2,240		2,237	50.0
桃	3,633	1,890		1,743	47.9
ブドウ	18,146	3,566	11,500	3,079	17.0
葉たばこ	67,911	67,911			0.0
生シイタケ	921			921	100.0
乾燥シイタケ	11,943	11,100		842	7.1
木材	5,898	5,898			0.0
木炭	57			57	100.0
花き	4,319	1,980		2,339	54.2

注) 内子町役場資料より作成

農林産物の出荷の8%程度を占めていると推定され、農産物の流通形態として、確固たる地位を占めている。「からり」の設立当初は、農産物の流通を支配する農協や、乾燥シイタケの流通を牛耳る森林組合は「からり」の直売体制に冷淡であったが、「からり」の会員数が増加し、農協の共同出荷より、販売価格の高い直売活動を抑制することは次第に困難になってきたのである。

表4は「からり」の出荷者の販売規模別の農家数を示す。これによると、年を追って販売額の増加がみら



写真3 買物客でごった返すからりの売場
(2004年11月)

れ、2003年現在では、100万円以上の販売額は124名（全体の34.6%）に達し、うち700万円以上の販売額を誇るものは16名（4.4%）にも達し、「からり」の直売事業のみにたずさわって、農業経営の維持できているものもある。



写真4 マイカーの交通整理をするからりの警備員
(2004年11月)

表4 からりの出荷者の販売規模別農家数(1996～2003)

	1996	1998	2000	2002	2003
0～10万円	55	47	75	77	90
10～50	75	78	96	97	89
50～100	24	41	54	65	57
100～200	10	28	37	46	55
200～300	6	16	13	24	24
300～500	5	9	17	21	22
500～700	1	4	9	7	7
700万円以上		3	4	7	16

注) 2004年からり資料より作成

IV からりの顧客の発地とその動向

内子町「からり」の農産物直売所への来訪者の発地はどこか、その来訪者が「からり」をどのように評価しているかなどについては、「からり」と藤目節夫が共同で実施した2002年9月22・23日のアンケート調査⁴¹⁾がある。調査対象者は1,000名近くに達するが、それは学生などを補助員としてなされたものであり、来訪者の地域別発地においても東予・中予・南予の別、松山市・内子

町・県外などとやや大まかであり，訪問地についても松山方面とか，南予方面とかやや大まかである。地理学を専門とする筆者には，来訪者の発地が松山市であってもどの地点から来訪しているのか，観光地を訪れるといっても，どのルートを通してどの観光地を訪れるのかなど，より詳しく地域に落として，1人の来訪者の動向を統一的に考察してみたいと思い，2004年11月20日（土）に，ランダムに選んだ50名の来訪者を対象に面接・聞き取り調査の形態で，来訪者の属性，「からり」への評価，来訪者の動向などをさぐってみた。以下の図4と表5がその集計結果である。

図4は「からり」への来訪者の発地を，地図上にドットしたものである。図4の図郭外の者は千葉県・神奈川県・滋賀県と3名を数えるが，50名中47名のものは，南は宇和島市から，西は新居浜市にかけての者である。うち36名のものは松山市とその近郊の者であり，顧客の70%余は松山市と松山都市圏

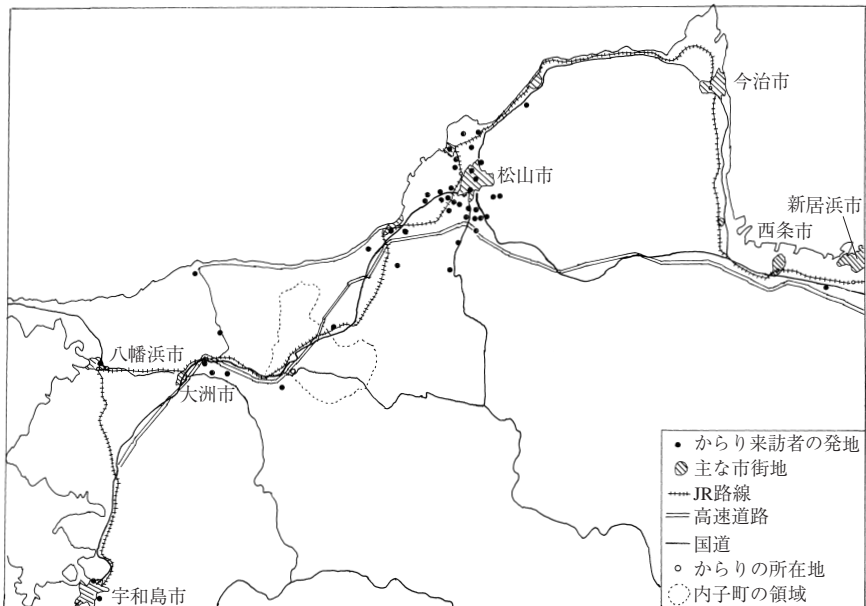


図4 からりの来訪者の発地（2003年11月）

注) アンケート調査によって作成

表5 内子町「からり」の来訪者に対するアンケート調査結果
(2004年11月)

I. 来訪者の特性	
1. 年齢	
① 19歳以下	0
② 20～29歳	4
③ 30～39歳	15
④ 40～49歳	4
⑤ 50～59歳	18
⑥ 60～69歳	5
⑦ 70～79歳	4
計	50
2. 来訪形態	
① 個人	1
② 家族	44
③ 友人	5
④ その他	0
計	50
3. 交通機関	
① 自転車	1
② 自家用車	49
③ その他	0
計	50
II. からり・古い町並み・観光農園に対する評価	
1. からりで最も評価する点は何ですか(2つ解答)	
① 農産物を買うのによい	41
② 休憩によい	20
③ 川に挟まれて公園のような雰囲気がある	33
④ 農家の人や直売所の人との交流が出来る	3
⑤ アイスクリームを食べるのによい	1
計	98
2. 内子の古い町並みに行ったことがありますか	
① しばしば行く	2
② ときどき行く	6
③ たまに行く	34
④ 行ったことは無い	8
計	50
3. 町並み保存に努力した内子町の姿勢をどう思いますか	
① 大いに評価する	32
② どちらかといえば評価する	0
③ 評価しない	0
計	32
4. 内子町の観光農園に行ったことがありますか	
① しばしば行ったことがある	1
② ときどき行ったことがある	22
③ 行ったことがない	27
計	50

注) 2004年調査による

を発地とするといえる。

表5のⅠから来訪者の年齢構成をみると、50歳代以上の者が27名(54%)を占めるが、30歳代のものも15名(30%)を占め、来訪者に壮年層も多いのが特色といえる。来訪形態は家族単位が44名(88%)と多く、来訪の交通手段は自家用車利用が圧倒的に多い。以上のことから「からり」の来訪者は、松山都市圏の50歳代以上の高齢者が最も多いが、週末には30歳代の子供づれの夫婦も多いことがわかる。

表5のⅡは「からり」の評価と内子の町並み、観光農園について尋ねたもので

ある。「からりで最も評価するものは何ですか」の質問に対して、「農産物を買うのによい」という答えと、「休憩によい」が併せてほぼ同等であり、「からり」が公園のような雰囲気を持ち、休憩によいという点を高く評価していることは、注目に値する。

内子は古い町並み保存に力を入れているが、その町並みに行ったことのある来訪者は84%に達し、町並み保存に努力した内子町の行政の姿勢にも高い評価を与えている。内子町は愛媛県下でも観光農園が特に多い市町村であるが、



写真5 からりあぐり亭で昼食をとる来訪者
(2004年11月)



写真6 からりあぐり亭のもちつきのイベント
(2004年11月)

「からり」の来訪者の46%の人は観光農園にも行ったことがあると答えている。からりの繁栄は内子町の町並み保存や、観光農業の発展等地域の観光資源の活用と相乗効果をもっていることがよくわかる。

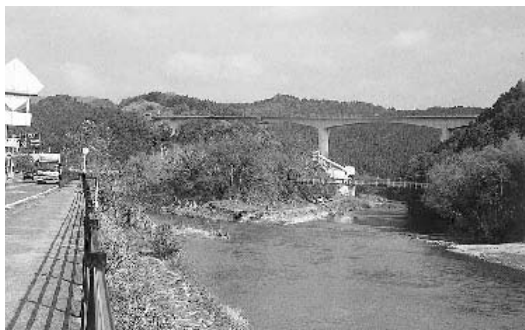


写真7 小田川(左)と中山川(右)の合流点に立地するからり
(2004年11月)



写真8 からり催事広場でくつろぐ来訪者
(2004年11月)

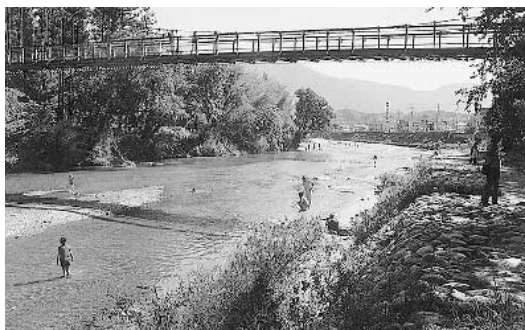


写真9 小田川にかかるつり橋とその下で水遊びする子供たち
(2005年8月)

V 地域資源の活用

内子町の直売所「からり」の発展は、内子町の地域資源の活用と密接な関連があるということが推察できる。ここでは内子町の町並み保存と観光農業、それにグリーンツーリズムについて述べてみたい。

(1) 町並み保存

内子町は1982年の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、今や愛媛県有数の観光地になっていることについては、既に述べている。町並み保存運動については、山崎薫の「町並み保存の背景とその成果⁴²⁾」に詳細に報告されている。それを要約すると以下のようなものである。内子町は江戸末期から明治年間にかけての商家や製蠟所が旧街道沿いに並ぶ町並みの美しいところであった。その古い町並みに最初に注目したのは、製蠟で栄えた芳我家の一族で、妻の実家に帰郷していた内子町八日市の画家井門敬二氏であっ



写真10 内子町並み保存地区内の上芳我邸
(2005年8月)



写真11 内子町並み保存地区内の修理された民家
(2005年8月)

たという。時あたかも全国的に町並み保存運動が盛んになり、1972年から文化庁は全国22箇所の第一次集落町並み調査を開始した。内子町の町並みはその調査地の一つに選ばれたのである。内子町役場は1976年町役場に商工観光課を設けて、町並み保存を町づくりの一環として推進⁴³⁾することになった。1982年には内子町の^{ごこく}護国、八日市の3.5haが国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、以後国庫補助事業として、保存地区内にある伝統的建造物等の修理、地区内にある伝統的建物群と調和のとれた修景⁴⁴⁾が行われるようになった。内子町の町並みを訪れる観光客の推移は、図5に示す。上芳我邸^{はが}は1981年

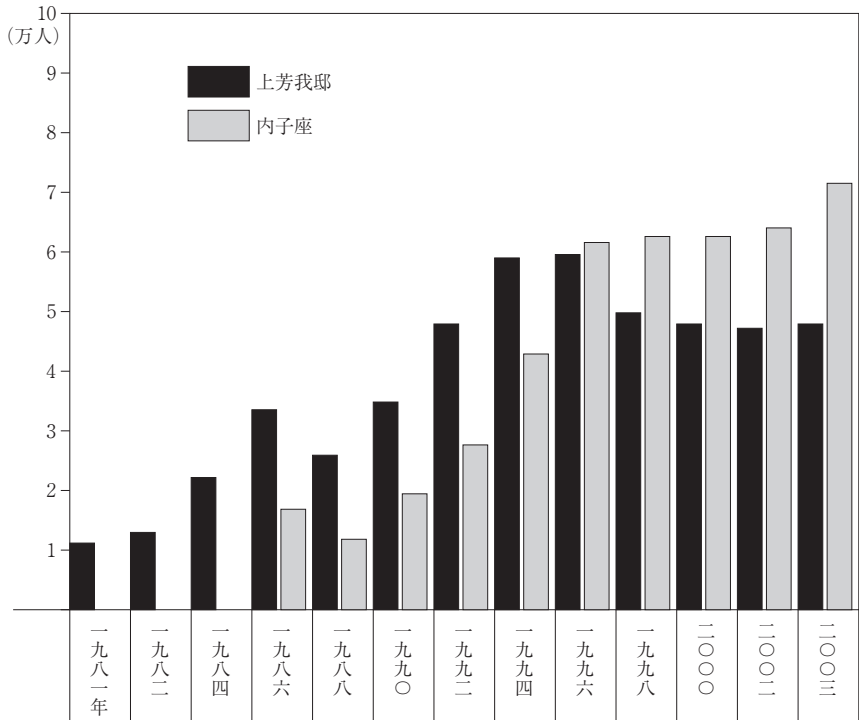


図5 内子町の上芳我邸と内子座の入込客数の推移 (1981~2003)

注) 内子町役場資料より作成

に内子町と借地契約を結び木蠟資料館としてオープンし、町並み保存地区内の観光のシンボルである。一方、内子座は町並み保存地区からは離れた六日市にあるが、1916年（大正6）建築の本格的歌舞伎劇場である。劇場内には、太鼓

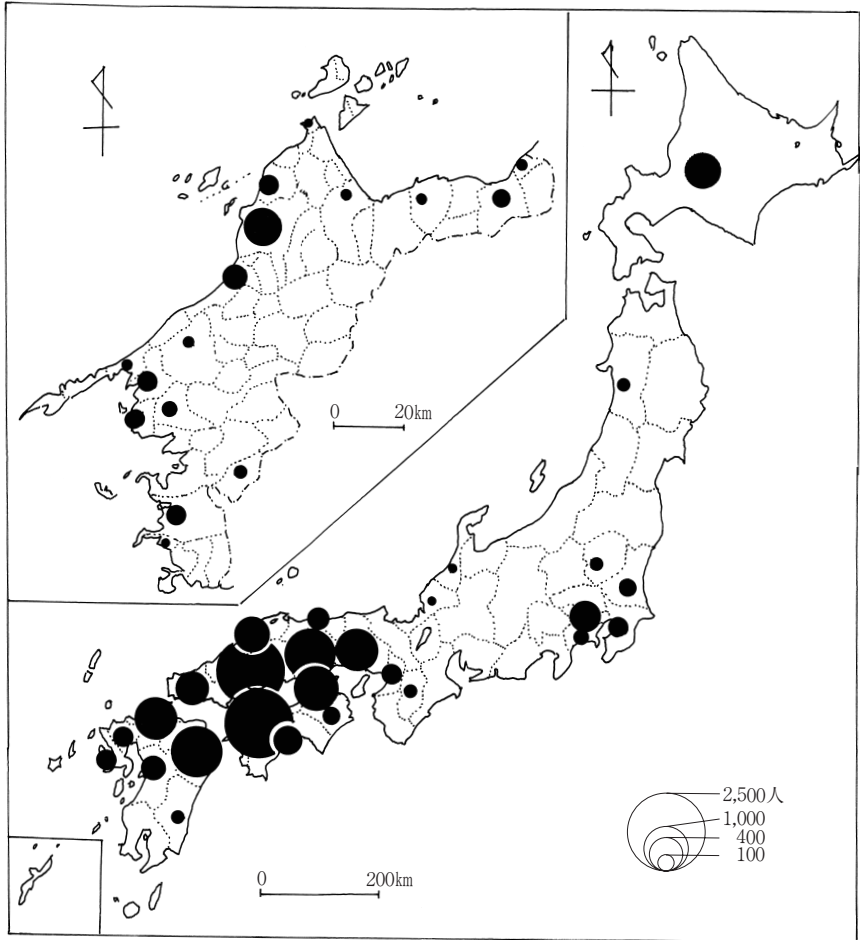


図6 内子町上芳我邸の団体客の発地（2004年）

注）上芳我邸団体客受付簿より作成

櫓・木戸・榎席・回り舞台・花道・奈落などがある。町並み保存の流れを受け、1985年には修理復元され、翌1986年より一般公開されている。両施設の観光施設の観光客の推移をみると、逐年増加し、2003年現在では、上芳我邸5万人弱、内子座が7万人余、両者を併せると年間12万人の観光客が来訪していることがわかる。

図6は上芳我邸の団体客の発地を示しているが、来訪者の多いのは、中国・四国地方と北九州であり、愛媛県内では、松山市を中心とした中予地区が多く、次いで東予地区と南予地区の諸都市に多い。

(2) 観光農業

内子町は中起伏の山地が卓越し、谷底平野の発達乏しいところから、水田には恵まれず、山腹斜面に畑地が卓越する山村である。1960年の耕地構成をみると、水田596haに対して、畑地は727haに達し、水田率は45.2%にすぎなく、四国山地のなかでは、畑地卓越山村の様相を呈する山村であった。1970年からの国の減反政策後は水田は急速に減少し、2003年現在では水田331ha(26.7%)に対して、畑地は912ha(72.6%)に達し、畑地のうち樹園地面積は662haを占める有様である。2003年現在でみると、柿234ha、クリ304ha、ブドウ55ha、日本ナシ13ha、モモ11haであり、落葉果樹が卓越する。このうちブドウ・ナシ・モモ等は食味のよい利点を生かし、観光農園となっているものが多く、松山市に近接しているところから、愛媛県下で、最も観光農業の発達しているところである。

内子町の農園は、内子町役場の資料によると、ブドウ園が21、ナシ園が4、リンゴ園が2、モモ園が1となっているが、観光農園と公表していないものも併せると、50園程度にも達すると推察されている。道路沿いの直売店が早く発達したのは、小田川沿いの国道379号沿いにあり、すでに1970年ころに開始されたという。

本格的な観光農業の開始は、1981(昭和56)年神奈川県川崎市の生田高校

の修学旅行生を、4戸の農家が受け入れたことに始まるという。当時の内子農協は観光農業を認めず、観光農業を指向する農家を農協共販から除名したが、除名された4戸のブドウ栽培農家は、内子町観光ブドウ組合を結成し、観光農業を推進していったのである。観



写真12 内子F観光農園でブドウ狩りを楽しむ家族
(2005年8月)

光ブドウ園が収益を伸ばして行くと、農協共販に従事していたブドウ園のなかでも内子町果樹観光同志会の名のもとに、1985年ころから観光ブドウ園を相

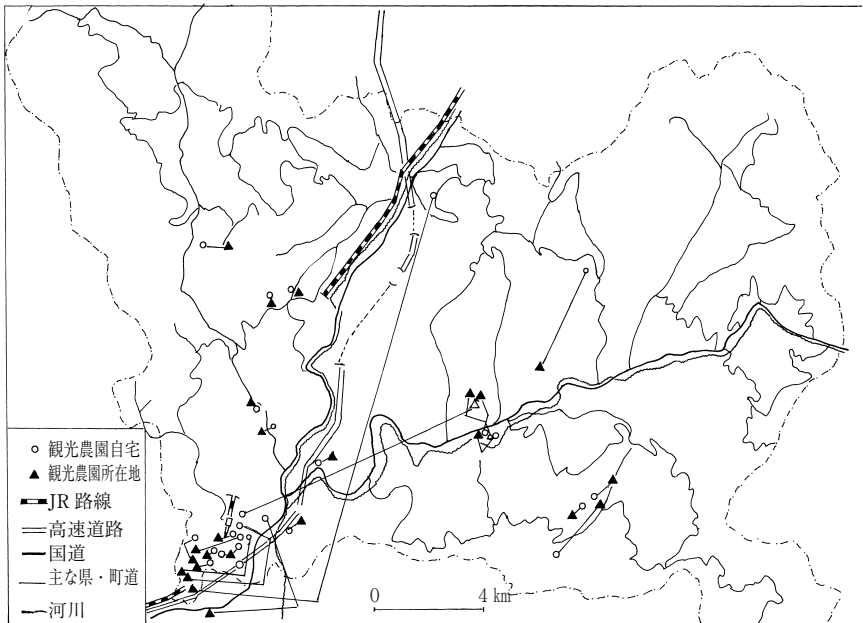


図7 内子町観光農園の所在地とその自宅 (2003)

次いで、開園していく。2004年現在、先行の内子町観光ブドウ組合に属するものは11農園、農協系の果樹観光同志会に属するものは7農園、どちらにも属していない観光ブドウ園は3農園となっている。

図7は、観光ブドウ園の所在地と自宅の位置を示しているものである。これによると、自宅に近接して、観光農園のあるものもあるが、自宅と観光農園が数kmも離れているものもある。それは観光農園は観光客の誘導を第一義とするので、交通の便利な、広大で傾斜のゆるやかな優良農地に立地することによるものである。

内子町を含む愛媛県の大洲市・喜多郡は大洲喜多地区として大規模な国営農地開発事業の実施された地域として知られている。その事業は1975年に着工して、1988年に完成している。13年間に及ぶ農地開発事業に費やした事業費は216億円であり、506haの農地開発を行っている⁴⁵⁾ 図8はその開発地域を示

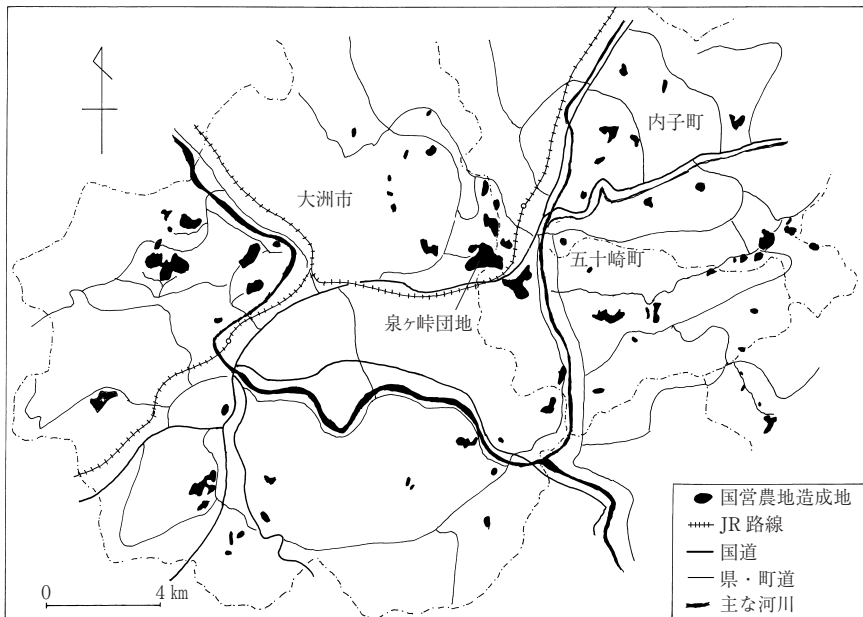


図8 内子町の国営農地開発地の分布

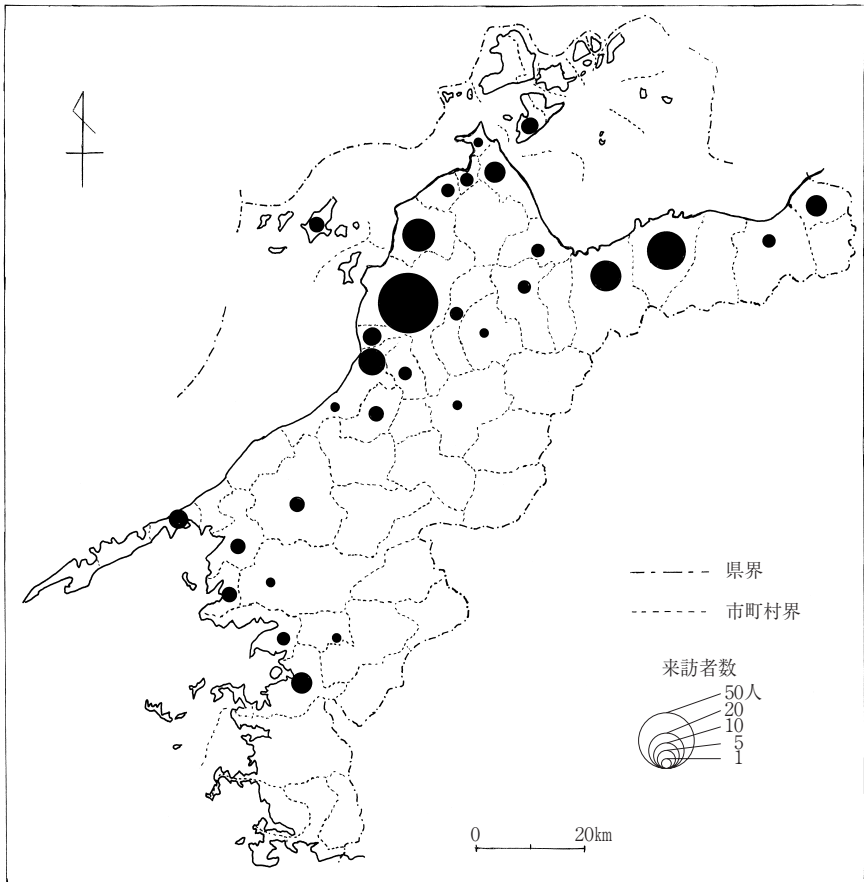


図9 F観光ブドウ園の来客の発地(1999年)

注) F観光ブドウ園受付簿より作成

しているが、内子町域では16団地・117haが開発されている。内子町の観光ブドウ園は町域南部に集中しているが、その多くは松山から大洲に通じる国道56号に隣接する国営農地開発事業で造成された、広大で緩傾斜地の畑地に立地しているのである。

観光ブドウ園は食味のよい巨峰、ピオーネなどを主として植栽しているが、

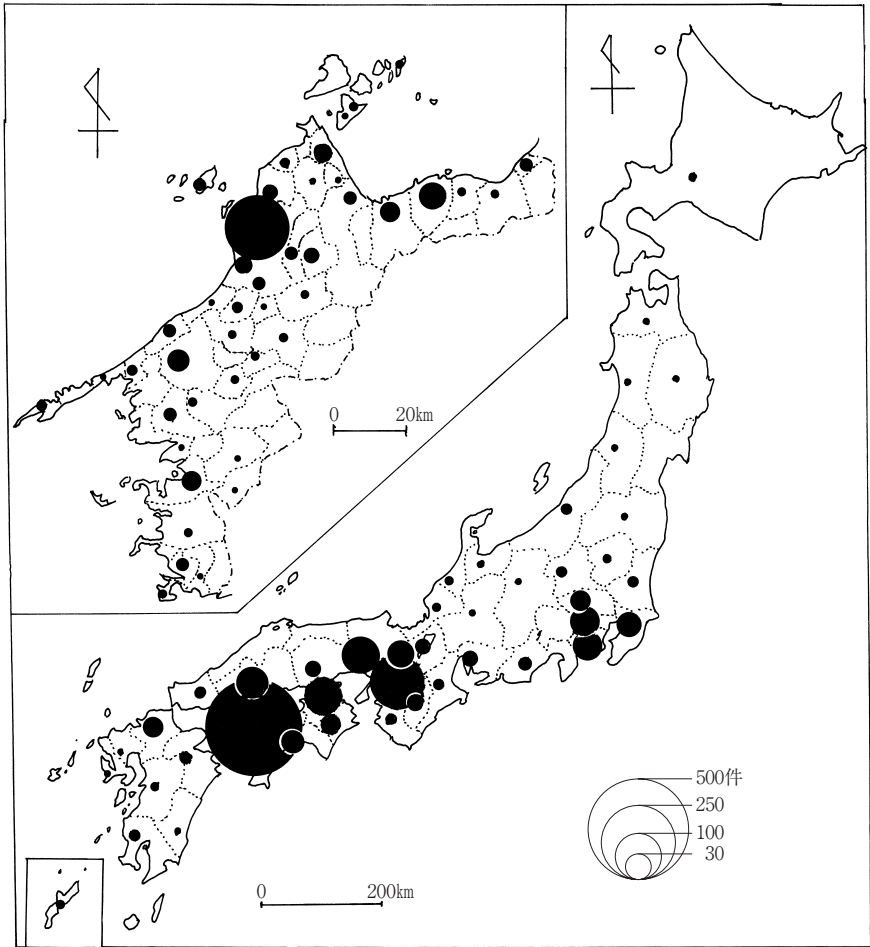


図10 内子町のF観光農園からの宅配便の発送先（2003）

注）F観光農園宅配便送状控より作成

入園料は大人1,000円・小学生700円・幼児300円で、食べ放題、持ち帰り品は1kg1,000円としている。農園内には、駐車場、トイレ、管理小屋、休憩所などを設置する必要があるが、設備投資は比較的少額ですみ、摘み取り・選別・

箱詰めなどに労力を要さなく、農家が自分で単価を決められるところから、農協共販や、個人的な卸売市場への出荷に比して粗収入は多い⁴⁶⁾といわれている。

観光ブドウ園の来客の発地はどこであろうか。図9は内子町泉ヶ峠団地（国営農地開発事業地）に約2.5haの観光ブドウ園を開園しているFブドウ園⁴⁷⁾の1999年の来客受付簿⁴⁸⁾より、来客者の発地を描いたものである。これによると、206人中192人（93%）は愛媛県内の来客であり、うち58人は松山市からの来客である。

観光ブドウ園の来訪者は、ブドウ狩りを楽しむのみでなく、宅配便を利用して、親戚・知人等に内子のブドウを宅送するのである。図10はF農園のブドウの宅送先を示すものである。8月12日から9月12日の観光ブドウ園の開園期間に日本通運のペリカン便で、587件のブドウを宅送しているが、ブドウの宅送先は約半数が愛媛県内である。



写真13 内子廿日市のF観光農園の宅配便の箱詰め作業
(2005年8月)

愛媛県以外では、近畿圏・首都圏が多いが、北は北海道から、南は沖縄県に至る全国各地に、内子の観光園のブドウが宅送されていることがよくわかる。

(3) グリーンツーリズム

近年都市住民の農村や農業への関心が高まるなかで、都市住民が農家に民宿し、農林業の体験を行うグリーンツーリズムが隆盛化してきた。全国的には農水省の支援を受け、日本グリーンツーリズム協会が結成されているが、内子町では2004年、同うちこグリーンツーリズム協会が発足した。内子町では発足

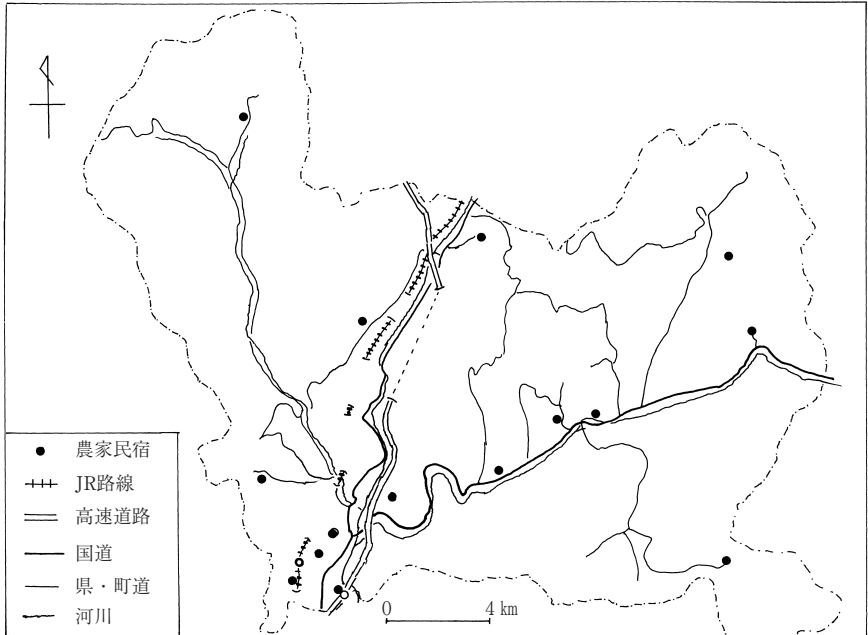


図11 内子町における農家民宿の分布 (2003)

当時 15 戸の農家民宿が始まった。このうち、公営施設が 4 戸、民間施設が 11 戸を数える。図 11 は、その農家民宿の分布を示すが、主として農村地域に点在しているのを特色とする。その農家民宿の K (五百木に立地) は、自家水田を利用して、モミまき、田植え、稲刈りを行い、町内の友人の農園を活用して、ブドウ・モモ・ナシ・リンゴ狩りが体験できるようになっている。

図 12 は民宿 K の宿泊客の発地を示しているが、隣接する中国・四国のみでなく、首都圏・近畿圏・中京圏からも、グリーンツーリズムで観客を招いている。グリーンツーリズムの宣伝は町の観光課が一役買い、各種の体験農業などを企画している。

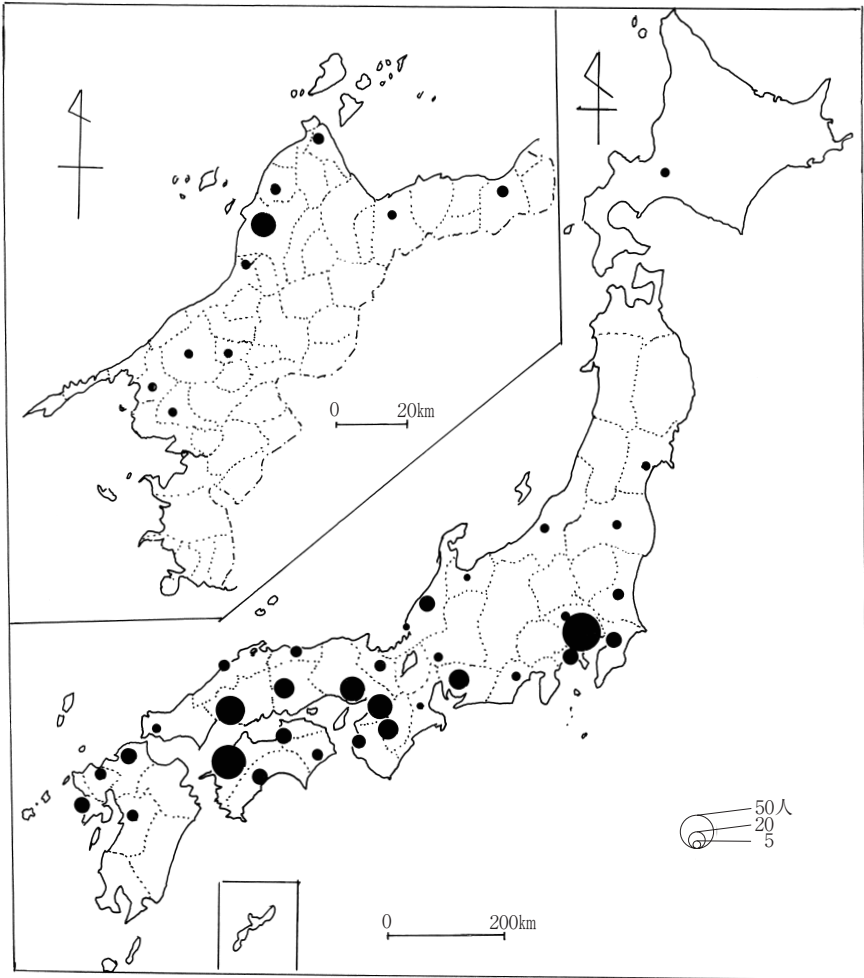


図12 民宿 K の宿泊者の発地 (2003)

Ⅵ 山村の変貌と今後の課題

中山町には、山腹傾斜に立地する畑作を主体とした集落が多い。内子町の無量の集落は標高150～200m程度の山腹緩斜面上に立地する中山町の標準的農業集落である。表6は無量の2004年の農家別の土地所有状況と生業を示す。1980年ころには、葉タバコ栽培によって生業を維持する農家が多く、出稼ぎ

表6 内子町無量の農家別の土地所有状況と就業状況（2004年）

農家番号	田	畑	計 (m ²)	家族員の就業状況（数字は年齢）	1980年頃の生業
①	11,632	45,769	57,400	男55（農業・からり）、女48（農業・からり） 男27（農業・からり）、女23（農業・からり） 男75（農業・からり）、女70（農業・からり） 男9（小学生）	農業・商工会職員
②	7,830	23,043	30,873	男46（農業・からり）、男74（農業）、女70（農業）	農業（たばこ）
③	4,670	21,302	25,972	男46（大洲・工具）、女46（大洲・工具） 女68（からり・あぐり亭）、男16（高校生）	農業（米・ミカン）
④	8,670	13,497	22,167	男59（農業）、女56（伊予・工具） 女24（伊予・工具）、女85（無職）	左官
⑤	3,043	19,178	22,221	男86（無職）、女78（農業）	役場助役
⑥	2,886	15,118	18,003	男45（小学校教員）、女42（看護師） 女19（専門学校）、男17（高校生）	農業（たばこ）
⑦	2,637	12,547	15,183	男81（無職）、女74（農業）	農業
⑧	3,983	11,038	15,021	男68（公民館長）、女66（農業）、男44（役場） 女44（専業主婦）、女11（小学生）、女8（小学生）	農業（たばこ）
⑨	4,572	9,391	13,963	男63（石工）、女60（農業・からり） 男30（役場）、女30（専業主婦）、女6（小学生） 女4（幼児）、女1（幼児）、女86（無職）	石工・農業（たばこ）
⑩	4,134	9,319	13,453	男50（運転手）、女50（給食センター）、男73（農業） 女68（農業）、男15（高校生）、女14（中学生）	出稼ぎ
⑪	9,923	3,191	1,314	女57（ヘルパー）	農業（たばこ）
⑫	3,033	8,701	11,734	男46（電力保安員）、女42（農業）、男17（高校生） 男13（中学生）、男79（農業）	タクシー運転手
⑬	1,210	8,517	9,727	男46（松山・市場）、女45（専業主婦）	松山・市場従業員
⑭	0	1,911	1,911	男75（無職）、女74（農業）、男39（内子・建設会社）	出稼ぎ
⑮	1,003	793	1,796	男50（土建業）、女58（専業主婦）、女88（無職）	左官
⑯	0	1,217	1,217	女82（無職）	出稼ぎ
⑰	0	1,101	1,101	男31（僧侶）、女82（無職）	僧侶

注）土地所有面積は農家台帳による。家族員の年齢は閲覧用住民台帳による。その他の資料は聞き取り調査による。

農家も3戸みられる。2004年現在「からり」に農産物と加工食品を出荷する農家は、農家番号①・②・③・⑨である。特に①の農家は家族ぐるみで野菜を栽培するのみでなく、加工食品を製造しているので、「からり」に野菜と加工食品を出荷し、「からり」屈指の売上げ額を誇り、年間販売額は1,000万円を越すという。農家番号②は、ナシ栽培・雑穀・野菜の栽培に精を出している。

図13は無量の土地利用状況を示している。これによると集約的な土地利用が見られる反面、一方では荒地や休耕地も多く、土地利用の二極分化がみられる。「からり」の営業開始は、農業労働力に恵まれ、農業に意欲を燃やしている農家には、野菜や果樹栽培によって、収入の増加の途を開いているが、一方では、



写真14 内子無量の集落と野菜畑 (2004年11月)
遠景は横山の集落



写真15 内子無量のからり出荷農家の野菜畑 (2004年11月)



写真16 内子無量の荒廃した畑 (2004年11月)

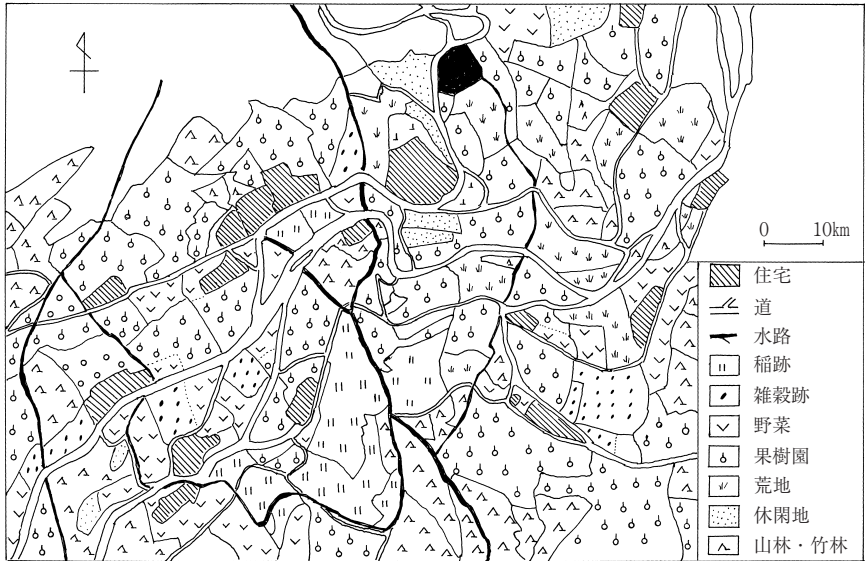


図13 内子町無量の土地利用図（2003年11月）

注) 実地調査によって作成

高齢化が進み、後継者も不足している農家には、何ら恩恵を与えていないといえる。

Ⅶ 結 語

内子町の農産物直売所「からり」は、河内紘一町長の推進する町内に内包する各種資源の開発を図る総合開発計画の一環として推し進められたものである。2003年現在直売所の販売額は4億円余に達し、直売所と出荷農家の情報交換にすぐれているところから、全国の視察・研修者が訪れ、全国的にも注目されている直売所の一つである。

直売所の発展を支えているのは、内子町が県都松山市に比較的近く、背後に南予の観光地をひかえ、「からり」の立地点が、小田川と中山川の合流点にあり、直売所自体が、公園のような雰囲気をかもし、高齢者夫婦や子供づれの若

い夫婦がドライブがてらに、農産物を買求め、他の観光地をめぐるのに、休憩地として、絶好の地点に位置していることによるものである。「からり」の来訪者の声を聞くと、古い内子の町並みを訪れているものが多く、長年にわたる町の町並み保存活動にも強い敬意を表し、県下で最も多いという観光農園に訪れている者も多い。直売所の繁栄は、町と町民の長年にわたる町並み保存運動や中山間地を利用した観光農園の発展と相乗効果を発揮していることがわかる。内子町は、ある点から見れば、平凡な一つの中山間地域であるかもしれない。しかしながら内子町の内包する地域資源に注目した河内町長や、一人一人の地域住民の地域おこしの熱意が「直売所からり」の繁栄をもたらしたのではないかと思う。

〔付記〕

本稿は2005年3月日本地理学会春季学術大会において研究発表したものに、加筆・修正したものである。資料収集に当たっては、内子町の河内紘一町長、当時の内子町の森長照博助役、「からり」の稲田繁・久保義雄支配人、同高本厚美社長、山本真二情報相談係長、観光ブドウ園の藤友光安夫妻・同藤田好秋夫妻をはじめ、取材に応じて下さった多数の内子町の現地の方々には御協力を賜った。なお本研究は平成15・16年度科学研究費補助金（基盤研究C）「農林水産物の直売による農山漁村の活性化に関する研究」（課題番号15500694）の一環であり、その研究費の一部を使用させていただいた。

注および参考文献

- 1) 篠原重則（1969）：人口激減地域の集落の変貌課程—四国山地中部と南西部の事例—，人文地理，21-5，pp.1～28。
- 2) 篠原重則（1974）：村落の共同体的性格と離村形態—四国山地東部名留川部落の事例—，地理学評論，47-1，pp.41～55。
- 3) 篠原重則（1976）：四国山地における集落移転とその諸問題—徳島県木頭村と愛媛県日吉村の事例，地理学評論，49-4，pp.217～235。
- 4) 篠原重則（1976）：高度経済成長期における山村の変貌，—愛媛県日吉村の廃村奥藤川と残存集落犬飼の対比，人文地理28-6，pp.86～106。

- 5) 篠原重則：(1991)：『過疎地域の変貌と山村の動向』大明堂，330頁。
- 6) 篠原重則：(2000)：『観光開発と山村振興の課題』古今書院，226頁。
- 7) 篠原重則：(1999)：農産物の直売と山村の活性化－愛媛県日吉村の事例－，香川大学教育学部研究報告Ⅰ，107号，pp.1～23。
- 8) 篠原重則(2002)：愛媛県中山町における農産物の直売と山村活性化の課題，愛媛の地理，16号，pp.22～30。
- 9) 篠原重則(2004)：ユズ加工品の直売と山村の活性化－高知県馬路村の事例－，愛媛の地理，17号，pp.34～49。
- 10) 篠原重則(2004)：水産物の直売と漁村の活性化－愛媛県三崎町の事例－，松山大学論集，16-1，pp.261～291。
- 11) 篠原重則(2004)：梅の生産・加工・販売システムの確立と山村の活性化－和歌山南部川村の事例－，松山大学創立80周年記念論文集，pp.339～368。
- 12) 農林水産部統計情報部(1998)：「地元農林水産物を活用した加工・販売事業による地域活性化への取組事例」157頁。
- 13) 近畿農政局(1999)「近畿の朝市・直売所一覧」，40頁。
- 14) 中国・四国農政局(2001)：「特集中国四国の地産地消について」，119頁。
- 15) 東北農政局(2003)：「東北管内における産地直送施設の概要」，446頁。
- 16) 関東農政局(2003)：「都市と農村のふれあいMAP－茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県・長野県・静岡県－。
- 17) 北陸農政局(2003)：「食と農の一体化推進プロジェクトチーム報告」，194頁。
- 18) 九州農政局(2003)：「新鮮農産物直売所の概要」，14頁。
- 19) 北海道統計情報事務所(2004)：「ふれあいファームガイド2004」，186頁。
- 20) 農林水産省統計部消費統計室(2005)：農産物地産地消実態調査の公表にあたって，統計部報しぐま7月号(通巻555号)。
- 21) 櫻井清一(1995)：農産物直売所の組織再編過程と新たな課題，農村生活研究，39-3，pp.13～20。
- 22) 櫻井清一(1997)：中山間地域における農産物流通システムの新展開－直売をはじめとする多様な販路形成－，農業研究センター経営研究39，pp.13～25。
- 23) 櫻井清一(2001)：農産物直売所を核とした生産，販売戦略とフードシステム，土居時久・斎藤修編『フードシステムの構造と農漁業』収録。
- 24) 片倉和人(2001)消費者にとって直売所の魅力とは－直売所の利用客の意向を探る－，農業と経済，67-9，pp.151～159。
- 25) 藤森英樹・飯坂正弘・櫻井清一(1998)：農産物直売所における消費者の野菜購入特性，中国農業試験場流通研究資料8，pp.73～78。
- 26) 小寺学(2000)農産物直売所の運営方法と販売行動の特徴－岡山県の事例を中心に－，中国農試農業経営研究，129，pp.18～29。

- 27) 辻和良 (2003) : 農産物直売活動の現状と展開方向, 和歌山県農林水産総合技術センター, 農業経営研究資料, 第2号, pp. 30~39.
- 28) 網野芳男・後由美子 (2000) : 観光農園および産地直売所への来訪者の特徴とその評価, 農村生活研究, 第44巻第4号, pp. 30~39.
- 29) 堀田学 (2002) : ファーマーズマーケットの今日的特質と定着方策, 農村生活研究, 第46巻第4号, pp. 6~14.
- 30) 鷹取泰子 (1959) : 埼玉県における共同経営農産物直売所の立地展開とその地域的性格, 埼玉地理 19, pp. 1~12.
- 31) 岡橋秀典 (1997) : わが国農村における農産物直売法の展開とその存立形態, 地域地理研究 2, pp. 44~55.
- 32) 藤目節夫 (2003) : 協働型まちづくりと地域自治—内子町を事例として—, いよぎん地域経済研究センター, 調査月報No 181.
- 33) 藤目節夫 (2004) : 愛媛県内子町のまちづくりと農産物直売所「からり」, 愛媛大学法文学部論集, 人文学科編, 第17号.
- 34) 内子町の地域振興策は集落住民が立案するが, その独自性が尊重され, みるべき地域振興策にのみ町予算が配分される。
- 35) 「からり」の命名は松山市のデザインオフィスであるが, 果楽里は果物を楽しむ里, 香楽里は香りを楽しむ里, 花楽里は花を楽しむ里, 加楽里は加工を楽しむ里を意味し, からりと晴れ晴れした気分, からりとすがすがしい時間, からりとした爽やかな出会いを楽しむという願いを込めているという。
- 36) 小田川と中山川は共に一級河川の肱川の支流である。小田川は河川延長36,350m, 流域面積62.8km²であり, 源流が四国山地の多雨地に属し, 水量豊富でかつては木材の筏流しが盛んであった。筏流しは1948年に終焉したが, むら興しとして復活した。中山川は小田川の支流で河川延長24,726m, 流域面積43.5km²である。
- 37) 「からり」の設立場所は, 頭初は現地点より2.5km中山川を遡った宿毛の谷底平野であったが, 現地点に立地していた製材工場が撤収し, そこに設立場所を変更したのである。
- 38) 藤目節夫の前掲書33)によると, 2004年までに講演会・シンポジウム73回, 招聘講師数は全国から延べ68名, 延べ参加者数5,000人を超えているという。
- 39) 参加農家は当初80人程度であり, 売場面積は30m²程度であった。施設建設費として内子町は200万円出費した。
- 40) 直売所運営協議会は, 2003年現在出荷者350人, 運営委員35人, 専門部会としては, ①明日のからりを考える会, ②イベント企画委員会, ③情報紙編集委員会, ④店舗レイアウト委員会, ⑤加工品開発部会, ⑥花部会がある。一方, あぐり運営協議会の2005年現在の構成員は農家の女性43人である。専門部会には, 飲食部, 製麺部, 製菓部, 素材部, 総菜部がある。
- 41) 野菜のなかでもキュウリとイチゴは, 栽培の歴史が古く, 農協のキュウリ部会, イチゴ

- 部会の組織が強く、「からり」への出荷比率が低いといえる。
- 42) 愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会 (1996)：『エコロジタウン内子の町並みと人々の暮らし』所収, pp. 167~172。
 - 43) 役場吏員の中心人物は岡田文淑氏であり、内子の町並み保存の意義を地区の住民にといてまわり、参加協力を依頼してまわったという。
 - 44) 内子町の八日市・護国町並み保存センター (2005)：「内子の町並み保存」によると、1978～2004年の27年間に、町並み保存に関して投じた国・県・町の補助金は約4億円であり、国費58%、県費10%、町費32%であった。
 - 45) 中四国農政局大洲喜多開拓事業所 (1889)：「拓けゆく霧の郷」(大洲喜多建設事業のあゆみ), 308頁。
 - 46) 観光農園での粗収入は、農協共販の出荷額に対して、単位数量当たり、だいたい倍額に達するという。
 - 47) 2.5haの観光ブドウ園のうち、自作ブドウ園は1haであり、1.5haは国営農地開発事業の隣接の開発農地を、他の土地所有者から借地している。このような事例は観光ブドウ園には多い。
 - 48) 受付簿には全来園者が住所・氏名を記入するわけではないが、記帳者のみから来園圏を描いても、大きな誤謬はないといえる。